

## 児童の動機づけ志向性と交友関係について

中山 勘次郎\*

CHILDREN'S MOTIVATIONAL ORIENTATIONS AND THEIR INTERACTIONS WITH PEERS

Kanjiro NAKAYAMA

In a cooperative problem-solving setting, Nakayama (1984) found that children's behaviors differed significantly as a function of their motivational orientations (i.e. social and task orientation). The present study examined whether these behaviors could also be observed in their interactions with peers. Children in four elementary-school samples (total N=674) were classified into four groups according to relative strength of social and task orientation. In order to tap various aspects of their peer interactions, subjects were given some questionnaires to complete. Socially oriented groups had many friends and shared various experiences with them. Moreover, the two socially oriented groups showed different interactions, though. HL group (social orientation being dominant) was frequently selected as friend by their classmates while sharing intimate and confidential experiences. On the other hand, HH group (both orientations being high) was active to form new friendships, and reported somewhat instrumental relations. These results, along with other findings on less socially oriented groups, paralleled to those found in a previous study (Nakayama, 1984), suggested that children's motivational orientations had a consistent influence in such settings.

Key words : motivational orientations, social orientation, task orientation, peer relationship, intimacy motive.

児童の学習活動の多くの部分は、学級や友人集団といった社会的文脈の中で行われているが、学習への動機づけに関する研究では、こうした観点を取り入れられることは少なかったように思われる。その中で、学習活動の社会的文脈を重視し、学習への動機づけを他の社会的な動機づけとの関連の中で把握しようとする研究も、いくつか試みられている (Schmuck, 1978 ; Nakamura & Finck, 1980 ; 中山 1983)。

Nakamura & Finck (1980) や中山 (1983) は、児童の動機づけ特性を社会志向性 (social orientation) と課題志向性 (task orientation) という2つの方向性を持ったものとしてとらえている。このうち課題志向性とは、

従来、学習・課題解決活動に対する内発的動機づけ傾向として扱われてきた動機と類似した概念であるが、社会志向性は、従来の親和動機などに比べ、より積極的な動機づけとして定義されている。すなわち社会志向性とは、対人関係や他者からの評価といった社会的手がかりへの感受性が高く、それらの手がかりを有効に利用しようとする積極的な対人的興味である。

また彼らは、これらの志向性が、異なる場面においてそれぞれ独立の影響を持っているというよりは、課題志向性・社会志向性の双方が関わり合って影響を及ぼしていると考えている。たとえば、同じ課題志向性の高い児童でも、他方の社会志向性の高低によって、学習・課題解決場面における行動に、それぞれ特徴的な傾向が観察されると予測しているのである。そのた

\* 上越教育大学 (Joetsu University of Education)

め彼らは、各志向性それぞれの効果ではなく、2つの志向性の高低の組み合わせによって児童を類型化し、各類型ごとの児童の学習行動や認知の独自性に焦点を当てて分析を進めている。

これにもとづいて中山(1984)は、二者間での共同課題解決場面において、両志向性の高低の組み合わせによって分類された各群の解決行動を分析した。それによれば、社会志向性・課題志向性ともに高い群(以下HH群と略)は、共同者との相互交渉が多く、とりわけ課題に関連した会話において積極的・主張的な行動傾向を示していた。一方社会志向性の優位な群(以下HL群)では、一般的・親和的な発言が多かった。また課題志向性の優位な群(以下LH群)は、全般に相互交渉が少なく、特に共同者に情報を提供したり質問に答えることが有意に少なかった。このように、各群に見出された特徴的な行動傾向は、各群の定義とよく対応しており、社会志向性・課題志向性の概念化の有効性を支持するものであった。

しかしこの結果は、実験的に設定された場面と共同者関係の中で測定されたものであり、この結果をさらに一般化するためには、こうした行動パターンが他の相互作用形態を含む学習場面でも、また学習場面以外の対人的場面においても、同様に見られるかについての検討が必要であろう。

このうち様々な学習場面での検討に関しては、競争的・共同的・個別的という3種類の学習モードに対する一般的な選好度(中山,1990)や教師の指導態度に対する認知(中山,1989)を用いて検討が行われており、全般に仮説を支持する結果が得られている。これに対して本研究では、学習以外の対人的場面における児童の行動傾向が検討された。そのため、児童にとって大きな影響力を持つと考えられる、仲間集団との相互作用に焦点を当て、友人たちとの日常の交友関係に対して、様々な角度から検討が加えられた。

友人との相互作用は、児童の学習活動と直接関係するものではないが、ソシオメトリックテストなどを用いた報告では、学習場面と遊び場面での友人選択は一般にかなり一致しており、両場面における仲間集団の範囲は重複する部分が大きいと言えよう。とすれば、共同課題解決場面での行動も、一般的な友人関係の中での行動傾向を大きく反映しているものと考えられる。すなわち、学習活動とは直接関係のない交友場面においても、共同課題解決場面で見られた行動と共通する行動特徴が観察されるのではないだろうか。

このうち、ここでは特に社会志向性の高い2つの群、

つまりHH群とHL群との差異に焦点が当てられた。HH群とHL群は、いずれも社会志向性が高く、友人との相互作用に積極的で級友からの人気も高いと考えられるが、両群の対人行動はかなり異なっている。中山(1984)によれば、HH群は活動的・主張的なものに対して、HL群はより静的で親密な行動を示していた。学習モードへの選好に関しても、HH群は特に競争志向的傾向が強いことが見出されている(中山,1990)。こうした特徴が、課題達成状況に限定されない一般的な行動傾向であるとすれば、日常の交友行動においても同様な差異が見られると予測される。

ところで、従来の交友関係は、ソシオメトリック地位得点をはじめとする人気の高さを指標として測定されることが多く、友人たちとどのような交友経験を共有し、またどの程度親密に交友しているかといった、交友経験の内容や性質の違いは必ずしもじゅうぶんにとらえられてこなかったように思われる。本研究では、このような交友経験の内容や性質に注目し、さまざまな側面から、その違いを明らかにすることが試みられた。

交友経験を扱った先行研究からは、いくつかの指標が提案されている。たとえばMcAdams, Healy, & Krause(1984)は、大学生を対象として、最近経験した交友エピソードの回想を求め、その内容やその中で自分自身の役割、経験した感情などを分析した。また田中(1967,1968)は、同じく大学生において、交友関係の親密度の指標として、共有した経験の種類豊富さとその内容に着目している。ここでは、これらの先行研究を参考に、交友関係の広さ・深さ・持続性といった側面に関して、いくつかの指標が設定された。またこのような問題意識から、本研究では児童の回想にもとづいて回答を求める方式が多く用いられた。しかしこのような方式では、個々の交友関係の性質や最近の交友経験が回答に大きく影響し、各指標への回答の間に干渉が生じることが予想される。そこで、なるべく多様な交友関係を分析の範囲に含め、同時に指標間の干渉を低減するため、ここでは複数の被験児集団を設定し、各集団に対してそれぞれ異なった指標を含む質問紙が実施された。

## 方 法

### 被験児

東京都、埼玉県および茨城県内の4つの小学校の5・6年生、計674名(男子327名、女子347名)。これらの児童は、所属する学校ごとに別個のサンプルとして、

内容の異なる質問紙に回答した。以下の記述では、4つの小学校をサンプルA～Dと記述し、それらを区別する。各サンプルごとの学年と人数はTABLE 1に示されている。

TABLE 1 4つのサンプルにおける被験児数と各志向性群の内訳

| サンプル | 所在地 | 学年  | HH |    | HL |    | LH |    | LL |    | 中間 |    | 計   |
|------|-----|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|
|      |     |     | 男  | 女  | 男  | 女  | 男  | 女  | 男  | 女  | 男  | 女  |     |
| A    | 茨城県 | 5   | 11 | 8  | 9  | 6  | 9  | 8  | 7  | 8  | 26 | 25 | 117 |
| B    | 東京都 | 5・6 | 13 | 15 | 19 | 14 | 13 | 16 | 15 | 17 | 50 | 41 | 213 |
| C    | 埼玉県 | 5   | 14 | 14 | 11 | 18 | 11 | 15 | 16 | 10 | 45 | 40 | 194 |
| D    | 埼玉県 | 5・6 | 8  | 16 | 14 | 11 | 16 | 7  | 11 | 15 | 29 | 33 | 170 |

### 動機づけ志向性の測定と児童の分類

社会志向性・課題志向性測定尺度(中山, 1986)がすべてのサンプルに共通に実施された。これは18項目よりなる質問紙であり、項目内容は、社会志向性については社会的評価や友人関係への積極的関与、課題志向性については、困難への挑戦と独力での達成傾向を中心に構成されている。回答は4件法で行われ、各志向性について9項目ずつの回答をもとに、志向性ごとの合計得点が算出された(得点範囲は9～36)。

この2つの志向性得点の相対的高低により4つの群が構成された。分類方法は、中山(1989)に準拠している。

具体的には、各サンプルごと男女別に、両志向性の平均値とSDが算出され、これにもとづいて各児童の得点が標準得点に換算された。この標準得点において、両志向性間に1以上の差がある場合、その高低に応じて社会志向性の優位な群(HL群)、あるいは課題志向性の優位な群(LH群)に分類された。また両志向性の差が0.5以下の場合、平均値の前後の得点を除いて\*\*、両志向性とも高い群(HH群)あるいは両志向性とも低い群(LL群)に分類された。ただし、両志向性とも標準得点の絶対値が1以上の者は、無条件にHH群・LL群に分類され、またこれらのどの条件にも該当しない中間的な児童は、分類から除外された。各群に分類された人数は、TABLE 1のとおりである。

\*\* 例えば平均値が24.6の時、24・25点の者は分類から除外する。これは、平均値の微妙な差異によって分類が大きく変化する(例えば平均値24.1の時24点でLL群だった者が、平均値23.9の時HH群になってしまう)のを避けるために設けられた補助的な基準である。

### 交友関係に関する質問紙

交友関係の多様な側面を把握するため、ここでは、友人数のほか友人との交友期間の長さ、友人との交友エピソードの数や交友集団の規模、友人との共有経験の範囲と内容などに関する質問項目が設定された。質問紙は4種類に分けられ、サンプルごとに異なる内容の質問紙が実施された。以下の指標の記述では、それらが実施されたサンプルはカッコ内に示されている。

なお、以下に述べる指標のうち、交友エピソード数に関する項目を除いた各指標では、具体的な交友経験の想起を促進するため、児童に特定の友人を想起するよう求め、その友人との交友経験に限定して回答を求めるという手続が、共通してとられている。その際、友人の範囲としては、「よくいっしょに遊んだり、勉強したりしている友だち」という基準が共通に用いられた。

①友人数と級友からの被選択数(A) ここでは、ソシオメトリックテストで測定されるようなクラス内での社会的地位ではなく、各児童が認知している友人の範囲を測定することが意図された。このため、最大8名までの友人の氏名の記入を求めた。友人の範囲は同一クラス内に限定せず、他のクラス・学年あるいは他の学校に所属している者を記入してもよい旨の教示が与えられている。なお予備調査では、ほとんどの児童が8名以下で友人名を記述しており、8名の上限は妥当であると考えられる。

②交友開始時期(B) 交友開始時期については、クラス替えの時期を基準に、5～6年生・3～4年生・1～2年生・小学校入学前の4つの時期から選択する方式が用いられた。このため、まず児童に友人3名の氏名を記入するよう求め、それぞれの友人について、知り合った時期を上記の選択肢から選択して回答するよう求められた。

③交友エピソード(C) 児童が、実際に友人とどのような交友活動を行っているかを調べるため、「この3日間ぐらいの間に、友だちといっしょに勉強したり、遊んだり、話したりしたこと」という条件で、最大5個までの交友エピソードを自由に記述するよう求めた。同時に、各エピソードに含まれる友人集団の人数を、自分も含めて回答するよう求められた。

④共有経験の種類(D) はじめに、児童に2名の友人を想起するよう求め、それぞれの友人について、いっしょにしたことがある活動・経験を、あらかじめ用意された20種類の共有経験から自由に選択するよう求めた。提示された共有経験のリストは、大学生を対象と

した交友関係の親密度に関する尺度(田中, 1967)から田中(1981)が小・中・高校生用に精選した項目にもとづき、さらに一部変更を加えたものである(項目内容はTABLE 4を参照)。

### 手続

社会志向性・課題志向性測定尺度と交友関係に関する質問紙とは別の冊子に印刷され、それぞれ別個の調査として実施された。いずれも、各クラスの担任教師に依頼し、クラスごとの集団で実施されている。

## 結果

### 友人の数と級友からの被選択数

友人の記名数は被験児1人あたり平均4.8人であり、そのうち49.9%が所属クラス以外、さらに12.8%が所属学年以外の友人であった。

各児童が選択した友人の数を群ごとにまとめたのがTABLE 2である。これをもとに、志向性群(4)×性別(2)の重みづけのない平均法による分散分析を行ったところ、志向性の主効果に有意差が見られた( $F(3,58) = 4.461, p < .01$ )。多重比較によれば、HH群・HL群がLL群と比較して有意に多くの友人を記名していることが認められた。性差および交互作用に関しては有意差は見られなかった。また、所属クラス以外の友人数・所属学年以外の友人数についても同様な分析が試みられたが、有意差は得られなかった。

ところで、本研究では記名する友人の範囲を同一クラス内に限定していないため、厳密にはソシオメトリックな各種の指数を算出するには適していない。しかし、概括的な指標のひとつとして、同一クラス内の児童間の選択データにもとづいて、各児童の被選択数および相互選択数が算出された。分散分析の結果、被選択数は、HL群が最も多く、LL群が最も少なかった( $F(3,58) = 3.599, p < .05$ )。多重比較では、HL群はHH・LL群との比較が、LL群はHL・LH群との比較がいずれも有意であった。また、相互選択数には交互作用が見出された( $F(3,58) = 3.296, p < .05$ )。単純効果検定および男女別の多重比較によれば、男子では被選択数と同様の傾向が見られたが、この傾向は女子には見られなかった。TABLE 2の下段には、男女別の相互選択数が示されている。

このほか、被選択数・相互選択数とも性別の主効果あるいはその傾向が認められた。被選択数は、男子平均2.88に対して女子平均1.92( $F(1,58) = 5.793, p < .05$ )と男子の方が多くの選択を受けており、相互選択数においても男子平均1.51、女子平均0.94( $F(1,58) = 3.554, p < .10$ )

と、男子の方が女子よりも高い傾向にあった。

### 交友開始時期

交友開始時期に関しては、小学校入学以前への反応が少なかったため、便宜上これを1・2年生のカテゴリーに含めて、2年生以前とした。記名した友人3名分の回答をこみにしたのべ数で、2年生以前、3・4年生、5年生以後の各時期に交友を開始した友人数の比率を示したのが、FIG. 1である。 $\chi^2$ 検定の結果、各志向性群の交友開始時期は有意に異なっていた( $\chi^2 = 18.777, df = 6, p < .01$ )。

しかし、このサンプルは5年生と6年生の2学年によって構成されているため、さらに対数一線形モデル(Everitt, 1977)によって、志向性群×学年×交友開始時期の3次元分割表の分析を行った。その結果、3次元

TABLE 2 友人の選択数と被選択数に関する平均値とSD

|       | HH         | HL         | LH         | LL         |
|-------|------------|------------|------------|------------|
| 選択数   | 5.63(2.06) | 6.00(2.39) | 4.59(2.35) | 3.33(2.02) |
| 被選択数  | 2.00(1.38) | 3.47(2.06) | 2.82(1.79) | 1.60(1.20) |
| 相互選択数 | 1.11(1.02) | 2.13(1.78) | 1.29(1.27) | 0.60(0.80) |
| (男子)  | 1.09(1.24) | 2.89(1.79) | 1.78(1.23) | 0.29(0.45) |
| (女子)  | 1.13(0.60) | 1.00(1.00) | 0.75(1.09) | 0.88(0.93) |

Note: TABLE 2, 3では、群×性別の交互作用が有意な指標については、男女別の平均値を併記した(カッコ内はSD)

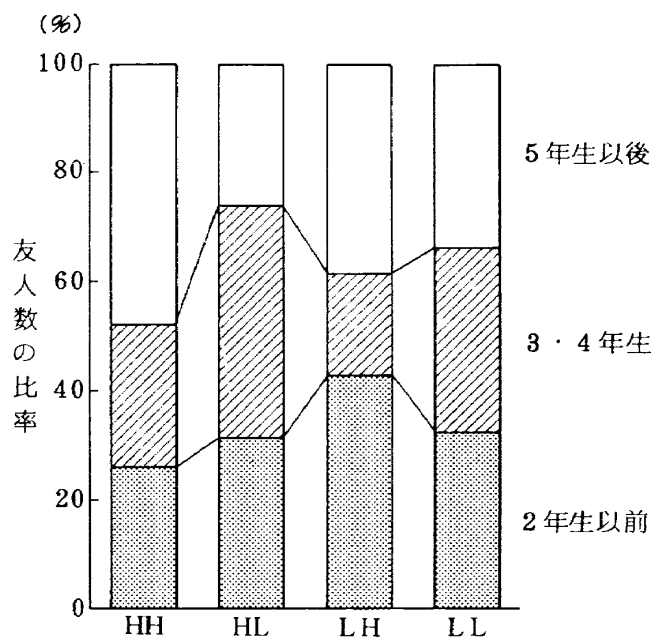


FIG. 1 各交友開始時期ごとの友人数の比率

交互作用は有意ではなく、4群の差に学年の影響は見られないと考えられた。志向性×交友開始時期の交互作用に関しては、HH群は他の群に比べて5年生以降の新しい友人が多く、逆にLH群には2年生以前からの古い友人が多いことが認められた。またHL群は、これらの中間の3・4年生からの友人が多かった。

### 交友エピソード

児童の記述した交友エピソードの中には、クラス全体や学習班での集団的活動のような明らかに自発的でない活動が一部含まれていたため、これらは除外して集計された。記述されたエピソード数は、全体として1人あたり平均2.4個(SD=1.72)であった。各群の記述したエピソード数はTABLE 3の上段に示されている。ここに見られるように、LH群が他の群と比較して記述数が少ない傾向にあり( $F(3,104)=2.649, p=.05$ )、多重比較によればLH群とHH・HL群との差が有意であった。また性差も見られ、女子の方が多くの交友経験を報告していた(男子平均2.07, 女子平均2.72:  $F(1,104)=8.015, p<.01$ )。

次に、1つ以上のエピソードを記述した者のみについて、各エピソードに含まれる人数の平均が求められたが、4群の間に差は見られなかった( $F(3,101)=1.565, p>.10$ )。

### 共有経験の種類

友人と共有したのある経験については、2人めの友人に対する回答を記入していない児童が予想以上に多かったため、1人めの回答と2人めの回答とをこみにして分析が行われた。各群の回答傾向は、TABLE 3の下段に示されている。なお予備的分析では、1人めの回答と2人めの回答との間に体系的な差は見られていない。

まず、選択した共有経験の数について、志向性×性別×学年の分散分析が行われた。その結果、志向性( $F(3,166)=3.677, p<.05$ )・性別( $F(1,166)=44.918, p<.001$ )・学年( $F(1,166)=6.928, p<.01$ )のいずれにも有意差が見られ、そのほか志向性×性別の交互作用も有意であった( $F(3,166)=3.280, p<.05$ )。志向性に関しては、社会志向性の高いHH・HL群がLH・LL群より多くの共有経験を報告しているが、これは男子のみの傾向であり、女子ではこのような差は認められなかった。また性別では、女子の方が男子より共有経験が多く(男子平均8.30, 女子平均11.77)、学年では6年生の方が5年生より多くの経験を共有していると回答していた(5年生平均9.36, 6年生平均10.71)。

次に各群が共有している経験の内容について検討す

るため、数量化理論第III類を用いて、20種類の共有経験の共通成分の抽出が試みられ、解釈可能な第2軸までが採用された(TABLE 4)。

TABLE 3 交友エピソードと共有経験に関する平均値とSD

|        | HH          | HL          | LH          | LL          |
|--------|-------------|-------------|-------------|-------------|
| エピソード数 | 2.61(1.32)  | 2.76(1.10)  | 1.93(1.16)  | 2.30(1.27)  |
| 人数平均   | 4.73(2.13)  | 4.97(2.93)  | 4.21(1.92)  | 3.99(2.46)  |
| 共有経験数  | 11.55(3.39) | 10.52(3.16) | 8.28(3.63)  | 9.50(4.58)  |
| (男子)   | 9.57(3.16)  | 10.00(3.20) | 6.86(2.90)  | 6.55(3.04)  |
| (女子)   | 12.47(3.09) | 11.20(2.98) | 11.58(2.93) | 11.67(4.29) |
| 第1軸    | -0.20(0.91) | 0.01(0.94)  | 0.48(1.38)  | 0.36(1.19)  |
| 第2軸    | -0.17(0.98) | 0.21(1.04)  | -0.03(1.09) | -0.08(0.96) |
| (男子)   | 0.18(0.90)  | -0.07(1.10) | -0.05(1.16) | 0.05(0.92)  |
| (女子)   | -0.35(0.97) | 0.55(0.86)  | 0.02(0.93)  | -0.18(0.98) |

(カッコ内はSD)

TABLE 4 共有経験に関する項目と数量化理論第III類の結果

| 項   | 目                          | 第1軸    | 第2軸    |
|-----|----------------------------|--------|--------|
| 1.  | 勉強の道具やノートを貸したり借りたりする。      | -0.247 | -3.672 |
| 2.  | 約束し合ったことはお互いを守る。           | 0.141  | -0.346 |
| 3.  | おみやげをあげたり、もらったりする。         | -0.296 | 0.462  |
| 4.  | 同じ趣味を持っていて、いっしょに遊んだり活動する。  | 0.718  | 0.226  |
| 5.  | 困っている時助けてやったり、助けてもらったりする。  | -0.806 | -0.605 |
| 6.  | 誕生日によんだり、よべれたりする。          | -0.806 | -1.106 |
| 7.  | 病気の時、お見舞いに行ったり、来てくれたりする。   | -1.313 | 3.427  |
| 8.  | 頼みを聞いてやったり、聞いてもらったりする。     | -0.910 | -1.017 |
| 9.  | いっしょにゲームをする。               | 1.153  | -0.106 |
| 10. | 本や雑誌、ゲームなどを貸したり借りたりする。     | 1.873  | 0.435  |
| 11. | 将来のことなどについて話したり、聞いたりする。    | -1.661 | 1.923  |
| 12. | いっしょにスポーツをする。              | 1.189  | -0.323 |
| 13. | ほかの友だちのことを話したり、聞いたりする。     | -0.126 | -0.313 |
| 14. | 好きな男の子や女の子のことを話したり、聞いたりする。 | -1.246 | -0.160 |
| 15. | 勉強のことを話したり、相談し合ったりする。      | -0.836 | -0.328 |
| 16. | 家に行ったり、来たりする。              | 0.871  | 0.101  |
| 17. | お互いの考えを話したり、聞いたりする。        | -0.997 | -0.229 |
| 18. | 悩みごとについて話したり、聞いてやったりする。    | -1.404 | -0.109 |
| 19. | 映画や買い物などで町に出る時、よくいっしょに行く。  | 1.167  | 1.306  |
| 20. | お互いに隠しごとをせず、なんでも話す。        | -1.085 | 1.037  |

第1軸では、いっしょにゲームやスポーツをしたり、映画や買い物に行くといった、さまざまな活動を通じての交友経験が正方向に、将来のことや好きな異性のことを話しあう、悩みを相談するなどの、会話的で内面的な交友経験が負方向に高い負荷を示しており、＜活動的-内面的＞の軸と考えられる。一方第2軸は、病気の時お見舞いに行く、将来のことについて話しあう、互いに隠しごとをしないなど、友人との親和的・相互信頼的な交友関係が正、物の貸し借りや頼みを聞いてあげる・聞いてもらう、というような手段的な交友関係が負の方向に負荷しており、＜親和的-手段的＞の軸と考えられる。

次に、各軸ごとの個人数を求め、それをもとに志向性×性別×学年の分散分析が行われた。第1軸に関しては、TABLE 3 下段に見られるように、社会志向性の高いHH群・HL群が4群の中では内面的経験に、LH群・LL群は活動的経験に偏っており、分散分析でも有意な主効果が見られた( $F(3,178)=3.424, p<.05$ )。またここでは性差も見られ、女子の方が内面的な共有経験を多く報告していた(男子平均0.79, 女子平均-0.51;  $F(1,178)=81.310, p<.001$ )。また第2軸では、男女によって志向性の効果が異なっており(志向性×性別の交互作用;  $F(3,178)=3.120, p<.05$ )、女子ではHL群が親和的、HH群・LL群が手段的な経験に傾いていたが、男子にはこの傾向は見られなかった。また学年間にも差が見られ、5年生は手段的経験を、6年生では親和的経験を多く報告していた(5年生平均-0.21, 6年生平均0.30;  $F(1,178)=10.816, p<.001$ )。

## 考 察

本研究では、児童の動機づけ志向性と彼らの行動傾向との関連について、実験的に設定された共同課題解決場面において観察された各群の特徴が、友人との交友関係という異なる場面の中でも同様に見出せるかどうかを検討された。このため、複数の指標を用いて、さまざまな側面から彼らの交友関係の違いが分析されたが、結果によれば、男女によって傾向が異なっている場合があり、必ずしも明確な結果は得られなかった。しかしその限界の中では、各群の交友関係は、ほぼ予測に沿ったものであったと言えよう。

交友関係に関する各群の特徴は以下のようにまとめられる。社会志向性の高い群(HH群・HL群)は友人の数が多く、友人と共有している経験も多様性に富んでいた。特に将来のことや好きな異性のことに関する会話など、自己開示をとまなうような内面的な接触が相

対的に多いことが特徴的であった。これに対して社会志向性の低い群では、友人との接触が少なく、表面的で活動的な交友経験が主である傾向が認められた。

社会志向性の高い群の方が、友人たちとより親密な相互交渉を行っているという結果は、経験的に見ても妥当なものである。本研究においてより重要な結果は、同じ社会志向性の高い2群の間でも、HH群とHL群との交友関係には異なった特徴が指摘されるという点である。

すなわちHL群は、級友から友人として選択されることが多く、特に男子では、相互に相手を選択する傾向が高いことが見出された。また女子では、親和的・相互信頼的な内容の経験を友人との間で共有している傾向も認められ、この群はどちらかと言えば友好的で緊密な友人関係を形成していると言えよう。これに対してHH群は、級友からの被選択数はHL群ほど高くないが、新しい友人関係の形成を積極的に試み、また親和的な交友経験よりは手段的な交友経験を多く報告している(ただし、女子のみ有意)など、より積極的・主導的であり、友人関係そのものへの興味だけではなく、友人関係を手段的に活用しようとする側面が推測される。

このようなHH群とHL群との特徴は、実験的な共同課題解決場面において、HH群が課題解決のために共同者に対して積極的・主張的な働きかけをしていたのに比較して、HL群の方はより親和的な内容の相互交渉を多く示していたこととも、よく対応している。

一方、社会志向性の低い2群に関しても、いくつか特徴的な結果が得られている。LH群は交友エピソードの報告が少なく、男子では、友人と共有している経験の種類も、他の群より少なかった。これらは、共同課題解決場面と同様、LH群における日常の友人との相互作用の少なさを示していると言えよう。また、古くからの友人との交友関係を維持している傾向が見られた。

さらにLL群は、友人の数(友人の選択数・友人からの被選択数)が少ない傾向が認められたほか、友人との共有経験に関しても、他の群との差異が見出された。すなわち、彼らが友人と共有している経験の範囲は狭く、その内容も表面的・活動的であり、相互信頼的な友人関係よりは手段的な関係に傾いているなど、この指標においてLL群は、交友関係に対して最も消極的であるように見えるのである。中山(1984)においては、この群の行動に目立った特徴が見出されないことが指摘されたが、あるいはそれは、ここに示されたような仲

間との相互作用に対する消極性のため、相互作用を伴う課題遂行場面において、彼らの個性的な行動特徴を發揮することができなかったから、と考えられるかも知れない。

以上に述べてきたように、本研究において見出された各群の特徴は、全般的に中山(1984)の結果とよく一致するものであった。これらの行動的特徴が、友人との交友関係のような、達成場面とはかなり異なった文脈においても同様に認められたことは、各群の行動や認知における特徴が実験的な課題解決場面だけのものではなく、より一貫性の高いものであることを示唆している。逆に言えば、学習活動とは異なる社会的場面での行動傾向を、児童は共同課題解決場面にも持ち込んでいると考えられ、そのことは学習・課題解決活動に対する社会的文脈の影響を強調する中山(1983)の立場を支持するものである。社会的場面における効果はそれほど明確ではなかったが、社会志向性と課題志向性という2つの動機づけ志向性の概念化が、児童の達成行動の特徴をより広い視野から分析するために、有効な手がかりであることが、本研究からも確認されたと言えるであろう。

ところで中山(1983)や本研究では、従来の親和動機に比べて、児童の達成行動により積極的に関与する社会的動機として、社会志向性が概念化されたが、McAdams(1980)は別の観点から親密動機(intimacy motive)の概念を提唱した。これは、親和動機と次のように区別される。すなわち、親和動機が他者から拒否されることへの不安を根底に内包しているのに対して、親密動機はこうした対人的不安を含んでおらず、他者との温かく緊密な関係への志向性を全般的に扱ったものである(McAdams & Constantian, 1983)。また、親和動機が他者との情緒的結合の形成に関して積極的・行動的な動機であるのに対して、親密動機は、受動的で相手を統制しようとしなく、静的な動機である(McAdams & Powers, 1981)。実際、親密動機の高い人は仲間から友好的と評価されており、心理劇において温かく親しみのある行動を示し、対人的状況に肯定的な感情を持ち、個人的に重要な経験として、愛や会話のテーマを多く報告するなど、この動機が対人的行動や認知の予測因として有効であることを、McAdamsたちは明らかにしている。

注目されるのは、McAdamsがこの動機を、勢力動機(power motive)とも比較し区別している点である(McAdams et al., 1984)。彼は、勢力動機が自己顕示的な動機であり、他者への影響力の強さを志向し、対人

関係をその手段として位置づけるのに対して、親密動機は他者との対等で調和的な関係を志向し、友人への信頼や自己開示が高いと述べている。大学生の回想した交友エピソードの分析においても、親密動機の高い者は二者間での交友経験が多く、聞き手役割を多くとり、相手に対する自己開示が多く、相手に対して高い信頼と関心を示しているのに比べ、勢力動機の高い者は大人数での交友経験が多く、主導的な役割をとろうとしているなど、彼の理論化を支持する結果が得られている。

この親密動機と勢力動機との区別は、本研究におけるHH群・HL群の結果と類似しているように思われる。すなわち、HH群の主導的・手段的な交友関係は勢力動機の高い者に、またHL群の相互選択の多さや親和的・相互信頼的な共有経験の多さは、親密動機の高い者にそれぞれ対応しているのではないだろうか。McAdamsはこの2種類の交友行動を2つの対人的動機から説明し、本研究では、これを2つの志向性の相対的強弱のパターンから説明しようとしているという違いはあるが、交友行動についていずれも同様なパターンの違いを見出したことは興味深い結果であろう。

しかし、先に述べたように、結果は被験児の性別によって微妙に異なっており、明確な結果とは言い難い。性別との交互作用が見られた指標を見てみると、相互選択数・共有経験数では男子にのみ志向性の差が見られ、親和的・手段的な交友経験では、逆に女子の差だけが有意であった。男子のみで認められた差は、いずれも交友関係の量的な側面なのに対し、女子ではその内容という、より微妙な点で差が見られたのである。

これらは、男女による友人とのつきあい方の違いを反映しているのかも知れない。一般に、女子の方が少数の友人とより親密な交友関係を形成していると言われており、そのことは本研究で見られた男女差においても確認されている。女子は男子より相互選択数が少なく、共有経験数は多かったのである。このように、女子の交友関係が全般的にきわめて親密度の高いものであるために、動機づけ志向性のような微妙な影響は量的な差として表われず、むしろその内容の個性として表われたのではないだろうか。これに対して男子は、大人数の友人集団を構成する傾向があり、対人関係に積極的かどうかの影響が、より直接的に友人数や共有経験数に反映されたと考えられるかも知れない。もちろん、この解釈はひとつの可能性にすぎず、一部の指標だけで結果を一般化することはできない。またこれらの性差は、男女で相反する結果が得られたというよ

りは、それぞれに敏感な指標が異なることを示すものであり、結果の全体的傾向と矛盾するものではないと言える。

いずれにしても、結果でまとめた各群の特徴は、性差を無視して一般化したものであり、この結果が男女ともに妥当なものと言えるかどうかに関しては、さらに感度の高い指標を設定し、詳細な検討を進める必要がある。それと同時に、本研究の結果は児童の自己報告に強く依存していたが、これらの結果を、実際の児童の交友行動において裏づける試みも、今後行われなければならないと考えられる。

### 引用文献

- Everitt, B.S. 1977 *The analysis of contingency tables*. London: Chapman & Hall.
- McAdams, D.P. 1980 A thematic coding system for the intimacy motive. *Journal of Research in Personality*, **14**, 413—432.
- McAdams, D.P., & Constantian, C.A. 1983 Intimacy and affiliation motives in daily living: An experience sampling analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 851—861.
- McAdams, D.P., Healy, S., & Krause, S. 1984 Social motives and patterns of friendship. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**, 828—838.
- McAdams, D.P., & Powers, J. 1981 Themes of intimacy in behavior and thought. *Journal of Personality and Social Psychology*, **40**, 573—587.
- Nakamura, C.Y., & Finck, D.N. 1980 Relative effectiveness of socially oriented and task-oriented children and predictability of their behaviors. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **45** (No. 185).
- 中山勘次郎 1983 児童における社会志向性と課題志向性について 教育心理学研究, **31**, 120—128.
- 中山勘次郎 1984 児童の社会志向性・課題志向性と共同課題解決事態における行動について 教育心理学研究, **32**, 276—285.
- 中山勘次郎 1986 児童の課題志向性・社会志向性の測定 —測定尺度および分類方法の再検討— 上越教育大学研究紀要 (第1分冊), **5**, 1—16.
- 中山勘次郎 1989 児童の動機づけ志向性と教師の指導態度の認知 教育心理学研究, **37**, 276—282.
- 中山勘次郎 1990 児童の動機づけ志向性と協同・競争・個別学習への選好 上越教育大学研究紀要, **10** (1), 43—54.
- Schmuck, R.A. 1978 Applications of social psychology to classroom life. In D.Bar-Tal & L. Saxe (Eds.) *Social psychology of education*. New York: Wiley.
- 田中祐次 1967 交友関係における親密度の測定に関する研究(1) 日本教育心理学会第10回総会発表論文集, 324—325.
- 田中祐次 1968 交友関係における親密度の測定に関する研究(2) —大学生の交友関係における親密性の強さと質についての調査— 日本教育心理学会第11回総会発表論文集, 370—371.
- 田中祐次 1981 友人関係 児童青年心理研究会 現代青少年の人間関係 —親子関係・教師生徒関係・友人関係の特質と生活感情— 伊藤忠記念財団

(1992年6月2日受稿)